S5-1

気づきを促す音楽療法の遷延性意識障害患者に対する効果

木沢記念病院　中部療護センター
○奥村　由香、奥村　歩、豊島　義哉、辻井　知香子、山森　亜美、中村　美津、
石山　光枝、篠田　淳

【目的】発達障害児領域の音楽療法（以下MT）では、音楽を発達段階にあわせて用い、刺激と反応をやりとりする中で気づきを促し自己像・情緒・認知を育てていく方法が多く用いられている。われわれはこの方法が交通外傷による遷延性意識障害患者の反応性の拡大に応用できるのではないかと考えリハビリの一環として取り入れた。今回、2症例についてその効果を検討したので報告する。【方法】MTは平成16年6月より週2回行い、観察法により変化を追った。これをSPECTによるＭＴ施行中の血流動態の変化と東北療護センター遷延性意識障害スケール（以下スケール）により検討した。【結果】症例１）17歳男性。音楽によって笑顔の頻度や大きさなどに違いがみられ、好みなどに関する表現として利用できる場面が増えた。また、左第二指は弦楽器を鳴らす際に随意的な伸展がみられるようになった。症例２）20歳男性。音楽刺激に対する好き嫌いを表情や発声で意思表示するようになった。また、触刺激が受容できる楽器の種類が広がった。MT施行中のSPECTでは両事例とも帯状回や視床の血流量の増加がみられた。スケールでは両事例に共通して「眼球の動きと認識度」「簡単な従命と意思疎通」の項目で改善の傾向がみられた。【考察】画像評価において意識や認知に関わる領域の血流量の増加が示されたことから、MTは外界や自己に対する認識を促すための更なる注意を喚起することに寄与したものと考えられる。スケールにおいても精神機能に関する項目に改善傾向がみられたことから、この方法は遷延性意識障害に対するチームアプローチのひとつとして機能するものと考えられる。